

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

百二十点の世界

小三・久野 夏葵

私はユメ。小三です。今、私は学校の五時間目のじゅ業を受けているところ。先生が、げんこう用紙を二枚と算数プリントを二枚、国語プリントを一枚、合計五枚をくばってくれた。

先生が、

「まずは国プリと算プリをやってね。それが終わったら、げんこう用紙に、『百点の世界』という題名で、自分が考える百点の世界を書いてください。それも終わったら読書だよ！」

と言いながら黒板にも同じ事を書いた。

えー、と私は思った。百点の世界なんてそんなすぐには思いつかないよ……ともかく先に国プリと算プリをやっておこう！

思いのほか、早くプリントが終わった。うーんどうしよう。まったく思いつかない。題名は決まってるし、題名だけ書いておこうつと。

けつきよく、五時間目の中で書けなかったので宿題になってしまった。

私は考えた。家に帰る時も、おやつを食べている時も、ずーっと考えた。でも、自分にとっての百点の世界が見つからないまま、ねる時間になってしまった。

しかたなく私はねた。そして、夢を見た。

「私、宇宙飛行士になりたい。」

そう、私は思っている。私は宇宙飛行士をめざしてきびしいくん

れんにはげんでいた。何年もくんれんをして、ようやく宇宙飛行士に選ばれるかもしれないという連絡をもらった。ところがちやうどそのころに、宇宙船の打ち上げ実験が五回連続で失敗してしまった。さらに政治家達が外国ともめて宇宙船自体を飛ばせなくなってしまう。私は、宇宙飛行士をめざす事ができなくなってしまった。ずっとめざしていたのにあきらめなくてはならない、そんな夢だった。そこで目がさめて、私はすっごいいきおいで飛び起きてつくえに向かった。

「百点の世界」

竹田 ユメ

私にとっての百点の世界は、なりたい大人をめざせる世界です。なぜなら……」

私は、書き終えた文章を目でたどっていった。間違いはなさそうだし、まだ外は暗い。もう一回きちんとねるぞー。

朝、いつもより早く目がさめた。時間があるので昨日の夜中に書きあげた「百点の世界」をもう一度読んでみた。そしたらちよつと引っかかる部分が出てきた。どこかというところ、題名「百点の世界」だ。

そこで私は考えた。あっそうだ！ 私は消しゴムとえんぴつを持ってきて、書きかえた。百点じゃ表げんできない、私はそう考えた。だからこう書いた。

「百二十点の世界」と。

勇気を持って、私の世界は百二十点だ！